

東南アジア史学会報 No. 38

昭和58年5月

研究大会報告

第28回東南アジア史学会秋季大会が、昭和57年12月11日、12日の両日、愛知大学記念会館にて開催されました。地方大会にもかかわらず90余名の御参加をえ、成功裡に幕を閉じることができました。大会での報告要旨は以下の通りです。なわ、Than Tun 博士による特別講演の内容については、「東南アジア歴史と文化」に掲載される予定です。

<自由発表>

Sip Song Panna の民族詩人贊哈について

—雲南地方における文化複合の一形態として—

馬場 雄司

シーサンパンナ

中国雲南省西双版納傣族自治州には、かつて、小乘仏教を信仰するタイ・ルー族の土侯国 Sip Song Panna が存在した。ルー族は14世紀に元朝の支配を受けて以来、召片領と呼ばれる首長が中国王朝の土司となっていた。

Sip Song Panna には、通過儀礼・仏教儀礼等、種々の儀礼で歌を唱う「贊哈」と呼ばれる詩人達が存在した。彼らはこうした場で即興詩を唱う他、インド系の物語等も流布していた。ルー族の男子はすべて一度は出家するものとされ、贊哈は主として一般民衆の還俗した者から歌比べによって選ばれていた。また、寺院・僧侶間には位階の存在が窺え、その頂点を召片領一族が占め、下層を一般民衆が占めた。一方、贊哈はルー族土着の宗教儀礼にも係わっていた。また贊哈には、出家の禁じられていた女性も存在しており、神を呼ぶ歌を贊哈が唱う事や、一般に女性が精靈に対する力を持つ事等から、巫女との係わりが考え得る。しかし、ルー族の儀礼には土着宗教的側面と仏教的側面とに分離できない事例が多く、贊哈もこうした複合的な宗教の脈絡で捉えられるべき存在と思われる。この事を理解する為に、宗教の複合化過程を通時に考察する必要があろう。

贊哈は伝承に拠れば、12代召片領奢隣法(15世紀)の頃に宮廷に集められたという。以

後、彼らの中から領主を讃える歌を唱う、領主公認の贊哈が選ばれた。14世紀までは、仏教は民衆に浸透しておらず、『百夷伝』(明初)等の史料にも、精靈を呼ぶシャーマンと音楽はみられるが仏教的因素はない。また「贊哈は、村落の頭目等と共に巫師から分化したもの」という報告もあり、贊哈は仏教浸透以前の基層文化に立脚したものようである。

奢隣法が出るに及び、Sip Song Panna の社会は大きく変動する。即ち召片領一族の各地への分封、仏教の浸透等による召片領権力の強化である。これに伴い、贊哈の歌唱内容、存在形態も変化する。奢隣法の代には『哇雷アタナイカシハタイ』なる書(タイ・ルー文)が記される。これには、仏祖が与えた叙事詩をもって王を讃える旨が述べられ、仏教と召片領権力との結びつきを示している。16世紀になると、Sip Song Panna はビルマに興ったトゥンゲー朝に侵略され、1627年にはこれに滅ぼされる。この動搖期に『哇雷蛇曼蛇勐』(クレイマユエカンハタイ)『哇雷麻約甘哈傣』が記される(いずれもタイ・ルー文)。两者とも、土着宗教を基礎に仏教に対する論駁をしているが、特に後者は「詩歌は仏祖が与えたのでなく人間の生活の所産である」と述べ、当時の召片領が叛逆書に指定したという。また、贊哈には領主に反抗する歌を編んだ者が存在したという。この事は

前述二書の内容を考えあわせると、権力に抵抗するという側面だけでなく、権力と結んだ仏教に伴い浸透したインド系文化と基層文化との軋轢を示唆している。インド系文化の受容は困難ではあったが、18世紀には、召片領が清朝の土司となり、Sip Song Panna は再び安定を取り戻す。ここに及んでインド系文化と基層文化との複合的な文化が形成される

のである。

ところで、召片領の権力強化がなされたのは明朝の土司になっていた時代だが、土司になることで、土着首長の権力強化がなされるという指摘もあり、このメカニズムが解明されれば、中国との政治的関係がインド系文化の浸透をもたらすという興味深い図式が描ける。この点については、今後の課題としたい。

中部タイ一農村の百年史

村方史料のような史料が欠如した村落において「歴史」を語ろうとすれば、人々の伝承（社会的事実についての）や記憶に頼らざるをえない。我々が、79年、80年に調査をした中部タイの一農村、ナコンチャイシー郡ワットラムット村第4区（ランレーム）は、創設後百年しかたっていない村であり、ほぼその形成過程を追跡することが可能であった。

まず時期区分としては、(1) 1940年まで、(2) 1940～60年、(3) 1960年以後、と3期にわけることができる。現在の村落の空間的構造は、中心部としてのバーン・カオ(A)，その分枝である部分(A')，村はずれの新村(バーン・マイ)(B)，華人集落、ライ・ジェック(C)とほぼ4つの要素にわけることができる。

上記第1期には、AとCだけが存在し、第2期になると、これにBとA'が加わり始めた。BとA'はこの時期はまだ分散的であったが、

北原 淳（神戸大学）

次の第3期に至ると、ラン・レームの構造要因として確かな存在となった。

ところで、この4つの空間的要素は決して平準的な関係ではなく、ある種の格差と序列を含んでいる。もっとも大きなカテゴリーとしてはタイ人と華人という区分があり、もちろん後者は下位に位置付けられる。またタイ人の中でも、草わけ的農民の多いA，その末裔としてのA'，流動的日雇労働者層の多いCという序列がある。そして構造的にタイトなのがAとCの集団であり、それは彼らの草わけ的立場によるものである。これに対し、もっとも流動的でルースなのがCの要素である。村落秩序はA（およびA'）の中心性とBおよびCの周辺性という二つの部分からなりたつ。

以上の諸事実は村落構造が無限定にルースではないことを示しているものと考えられる。

<シンポジウム> 東南アジアの民衆運動

趣旨説明

民衆運動の研究は史料、評価の双方から困難がともない、西洋でも東洋でも研究の立ち遅れが指摘されているが、今回東南アジアの民衆運動を共通論題に選ぶに当り、解明を望んだのは次の如くである。

米国の学者J.F.C.ハリソンは欧米近代の千年王国運動を取扱う一つの方法として
Popular millenarianism, Respectable

鈴木中正

millenarianism という二つの類型を立て後者の性格として精緻な教理学的哲学的関心をもち、論理の一貫性を追及するのに対し、前者の主要な特徴は、夢卜、占星術、素人風の暦学、天人相関説など民衆の生活を強く支配する伝統文化、民俗学的事象と深く係わることを指摘した。これは東洋にも妥当するし千年王国運動の範囲にとどまらず、広く民衆

前述二書の内容を考えあわせると、権力に抵抗するという側面だけでなく、権力と結んだ仏教に伴い浸透したインド系文化と基層文化との軋轢を示唆している。インド系文化の受容は困難ではあったが、18世紀には、召片領が清朝の土司となり、Sip Song Panna は再び安定を取り戻す。ここに及んでインド系文化と基層文化との複合的な文化が形成される

のである。

ところで、召片領の権力強化がなされたのは明朝の土司になっていた時代だが、土司になることで、土着首長の権力強化がなされるという指摘もあり、このメカニズムが解明されれば、中国との政治的関係がインド系文化の浸透をもたらすという興味深い図式が描ける。この点については、今後の課題としたい。

中部タイ一農村の百年史

村方史料のような史料が欠如した村落において「歴史」を語ろうとすれば、人々の伝承（社会的事実についての）や記憶に頼らざるをえない。我々が、79年、80年に調査をした中部タイの一農村、ナコンチャイシー郡ワットラムット村第4区（ランレーム）は、創設後百年しかたっていない村であり、ほぼその形成過程を追跡することが可能であった。

まず時期区分としては、(1) 1940年まで、(2) 1940～60年、(3) 1960年以後、と3期にわけることができる。現在の村落の空間的構造は、中心部としてのバーン・カオ(A)，その分枝である部分(A')，村はずれの新村(バーン・マイ)(B)，華人集落、ライ・ジェック(C)とほぼ4つの要素にわけることができる。

上記第1期には、AとCだけが存在し、第2期になると、これにBとA'が加わり始めた。BとA'はこの時期はまだ分散的であったが、

北原 淳（神戸大学）

次の第3期に至ると、ラン・レームの構造要因として確かな存在となった。

ところで、この4つの空間的要素は決して平準的な関係ではなく、ある種の格差と序列を含んでいる。もっとも大きなカテゴリーとしてはタイ人と華人という区分があり、もちろん後者は下位に位置付けられる。またタイ人の中でも、草わけ的農民の多いA，その末裔としてのA'，流動的日雇労働者層の多いCという序列がある。そして構造的にタイトなのがAとCの集団であり、それは彼らの草わけ的立場によるものである。これに対し、もっとも流動的でルースなのがCの要素である。村落秩序はA（およびA'）の中心性とBおよびCの周辺性という二つの部分からなりたつ。

以上の諸事実は村落構造が無限定にルースではないことを示しているものと考えられる。

<シンポジウム> 東南アジアの民衆運動

趣旨説明

民衆運動の研究は史料、評価の双方から困難がともない、西洋でも東洋でも研究の立ち遅れが指摘されているが、今回東南アジアの民衆運動を共通論題に選ぶに当り、解明を望んだのは次の如くである。

米国の学者J.F.C.ハリソンは欧米近代の千年王国運動を取扱う一つの方法として
Popular millenarianism, Respectable

鈴木中正

millenarianism という二つの類型を立て後者の性格として精緻な教理学的哲学的関心をもち、論理の一貫性を追及するのに対し、前者の主要な特徴は、夢卜、占星術、素人風の暦学、天人相関説など民衆の生活を強く支配する伝統文化、民俗学的事象と深く係わることを指摘した。これは東洋にも妥当するし千年王国運動の範囲にとどまらず、広く民衆

前述二書の内容を考えあわせると、権力に抵抗するという側面だけでなく、権力と結んだ仏教に伴い浸透したインド系文化と基層文化との軋轢を示唆している。インド系文化の受容は困難ではあったが、18世紀には、召片領が清朝の土司となり、Sip Song Panna は再び安定を取り戻す。ここに及んでインド系文化と基層文化との複合的な文化が形成される

のである。

ところで、召片領の権力強化がなされたのは明朝の土司になっていた時代だが、土司になることで、土着首長の権力強化がなされるという指摘もあり、このメカニズムが解明されれば、中国との政治的関係がインド系文化の浸透をもたらすという興味深い図式が描ける。この点については、今後の課題としたい。

中部タイ一農村の百年史

村方史料のような史料が欠如した村落において「歴史」を語ろうとすれば、人々の伝承（社会的事実についての）や記憶に頼らざるをえない。我々が、79年、80年に調査をした中部タイの一農村、ナコンチャイシー郡ワットラムット村第4区（ランレーム）は、創設後百年しかたっていない村であり、ほぼその形成過程を追跡することが可能であった。

まず時期区分としては、(1) 1940年まで、(2) 1940～60年、(3) 1960年以後、と3期にわけることができる。現在の村落の空間的構造は、中心部としてのバーン・カオ(A)，その分枝である部分(A')，村はずれの新村(バーン・マイ)(B)，華人集落、ライ・ジェック(C)とほぼ4つの要素にわけることができる。

上記第1期には、AとCだけが存在し、第2期になると、これにBとA'が加わり始めた。BとA'はこの時期はまだ分散的であったが、

北原 淳（神戸大学）

次の第3期に至ると、ラン・レームの構造要因として確かな存在となった。

ところで、この4つの空間的要素は決して平準的な関係ではなく、ある種の格差と序列を含んでいる。もっとも大きなカテゴリーとしてはタイ人と華人という区分があり、もちろん後者は下位に位置付けられる。またタイ人の中でも、草わけ的農民の多いA，その末裔としてのA'，流動的日雇労働者層の多いCという序列がある。そして構造的にタイトなのがAとCの集団であり、それは彼らの草わけ的立場によるものである。これに対し、もっとも流動的でルースなのがCの要素である。村落秩序はA（およびA'）の中心性とBおよびCの周辺性という二つの部分からなりたつ。

以上の諸事実は村落構造が無限定にルースではないことを示しているものと考えられる。

<シンポジウム> 東南アジアの民衆運動

趣旨説明

民衆運動の研究は史料、評価の双方から困難がともない、西洋でも東洋でも研究の立ち遅れが指摘されているが、今回東南アジアの民衆運動を共通論題に選ぶに当り、解明を望んだのは次の如くである。

米国の学者J.F.C.ハリソンは欧米近代の千年王国運動を取扱う一つの方法として
Popular millenarianism, Respectable

鈴木中正

millenarianism という二つの類型を立て後者の性格として精緻な教理学的哲学的関心をもち、論理の一貫性を追及するのに対し、前者の主要な特徴は、夢卜、占星術、素人風の暦学、天人相関説など民衆の生活を強く支配する伝統文化、民俗学的事象と深く係わることを指摘した。これは東洋にも妥当するし千年王国運動の範囲にとどまらず、広く民衆

運動一般についても妥当する指摘だと思う。集団的運動に民衆がまきこまれる度合に比例して、民俗学的事象、伝統文化との関連が強まるといえるのではなかろうか。

宗教との係わりについてみると、西洋近世に起ったドラマチックな宗教の世俗化はアジアではみられないといわれるが、民衆が運動の中で重要な役割をはたす場合は、宗教的因素は無視できないであろう。

民衆運動と宗教との係わりについて、宗教の世俗化の問題は重要である。西洋近世の初頭以来始まったドラマチックな世俗化の過程は種々の形をとりながらアジアにも起った。西洋ではマルキシズムの思想を千年王国信仰の世俗化したものとして把えんとする思考が多くの学者によって唱えられ、私も近著において世俗化の問題の一端にふれたが、このシンポジウムにおけるベトナムのゲ・ティン・ソヴェト運動もこれと関連する。

この運動は強いユートピア主義に基づけられたが、ユートピア主義と千年王国主義とは重なり合う部分が少くない。ブライアン・ウイルソンによると、ユートピア的対応とは超自然者によって与えられる原理によって、人は世界を再建し邪悪を除きうるとするが、千年王国主義と異なるのは、後者が新世界を実現するのは超自然者の力に限るとするのに対し、ユートピア主義では人がそれをなしうるとする点にあるとみる。これによれば、ユートピア主義は千年王国信仰の世俗化したものという角度から扱いうる。それにしても運動の中で民衆が演じた役割の大きい場合は、そこにおける宗教的因素を無視し得ないであろう。

宗教的救済には、a. 安身立命型、b. 呪術による現世利益、c. 千年王国信仰の三類型を区別しうるが、千年王国信仰の救済は現世的且つ集団的で、それが民衆の社会的抵抗運動の原動力となつたことは古今東西に多くの事例がみられる。

千年王国信仰の特色の一つに、来るべき至福と目前の大災厄とが結び合わされて説かれる点がある。ユダヤ・キリスト教世界、イスラム教世界では、災厄は至福到来のサインと

解された。これは恐らくペルシアのゾロアスター教に始まる二元論、二神論の影響によるものと思われるが、かかる宗教的伝統のない東アジア・東南アジアでは至福と災厄との関係が不確かであった。しかし中国史上の王朝革命時期には、大災厄が通過すれば、新しく良い時代が始まるという漠然とした意識が生じたらしい。これを心理的にみれば、災厄がもたらす絶望と不安、それと全く相反する安心感、希望、光明といったもののコムプレックスが民衆を強く動かしたに相違ない。千年王国運動が異常な熱気、熱信性、狂躁性を伴つたのは信者たちのおかれたこのような心理状態から生じたものと思われる。

ベトナムのゲ・ティン・ソヴェト樹立運動やビルマのサヤ・サンの反乱は1930年の大恐慌と関係ありといわれるが、民衆は世界恐慌を劫災とうけとったのではないか。特にビルマのサヤ・サンに協力した信者たちにとってそれはサヤ・サンのもたらす完全世界の兆としてうけとられたのではないか。

千年王国的民衆運動の誘因としてカリマス的リーダーの出現が甚だ重要な意義をもったが、ここに一つの問題がある。リーダーが唱え、信者たちがそれを信じた大災厄は、存在が意識を決定するという論法によるならば、実存する民衆生活の破局状況の反映に外ならないことになる。しかし一方的にこのようない解釈をみとめることはできない。カリマス的リーダーは一方では大災厄、現世界の破滅を主観的に創造してゆく。カリマス的というのはまさにそのような人物をいうのであろう。しかし民衆がそれを信ずるのは、それをうけいれる為の意識の準備が民衆の側にあるからで、その背後に民衆生活の危機的状況の存在を想定して差し支えない。運動の誘因をなす危機とは要するにリーダーの創唱と、信者がそれを認容する背後にある客観的な民生の危機のからみあいとして理解さるべきである。このことはリーダーの出現の偶然性と係わり合うもので、そのために歴史を社会法則に還元しきれない事情も存する。

上記にのべたような民生の危機の第一原因として、外圧が存する。外から加えられた政

治・経済的、文化的圧力は、民族又は社会の上層・下層をふくめた千年王国信仰をもたらす。ユダヤ教はその代表例であるが、かかる場合、千年王国信仰が民族主義運動の傾向をもち、両者が重なり合い交互に作用しあうのは不思議ではない。個人的なメシアの代りに集団としての民族がメシアの座を占領し、進歩の概念と結びつき政治統制の手段と化することが多い。G・リュウィーは近代インドの民族主義運動、ビルマのサヤ・サンの反英運動について、民族主義と千年王国運動との結合関係を指摘した。インド・ナショナリズムは古代インドの靈的・精神的文化を理想化し、神聖にして母なる国インドの観念を作り上げ、神と人との一体化を説くバラモン教、ヒンドゥー教の世界は「新しいエルサレム」の地上における実現を主張する千年王国信仰に外ならないと説く。

サヤ・サンの運動は未熟な千年王国運動で民衆がサヤ・サンに対してもったイメージは転輪王、未来仏のそれであり、彼の実現する世界は千年王国的色彩をもつとリュウィーは説く。

民生の危機の第二原因として、既存の権力が特定の宗教々団に迫害を加え、信者たちの生活が破局に陥れられる場合がある。この場合特に教祖が殉教者となれば、強いメシア信仰が教団の教義の主軸となり易い（ゾロアスター教、マニ教、キリスト教、イスラム教シーア派）。

サヤー・サン叛乱をめぐって

1930—32年にかけて下ビルマ、デルタ地帯を主要な舞台として勃発した、いわゆるサヤー・サン叛乱はビルマ史上最大の農民叛乱として、またその運動の独特な性格によって研究者の関心を惹いてきた。なかでも叛乱の指導者サヤー・サンという人物のカリスマ性、イレズミに代表される戦術における呪術的因素、さらに農民救済のヴィジョンの千年王国的色彩など、この叛乱の伝統的、土着的、宗教的側面が多くの考察の対象となっている。

第三の原因として民衆一般の生活の危機を挙げうる。中国の王朝革命史において、千年王国信仰の強いセクトが起爆作用の役目をはたし、動乱、革命への過程が始まったのはその一つの好例である。サヤ・サンのケースも他の一例であろう。しかしこの場合、宗教には無関心のアウトサイダー、軍事的政治的野心家、復讐者や、もの盗りなど、暴力によって私的目的を果たそうとする人々が宗教運動のかもし出す異常な心理状況、熱気の中で動乱に参加し、このため運動の規模は拡大するが、その性格は変質する。G・リュウィーはこのような事例を数多く指摘するが、サヤ・サンの運動の後半段階もその一例である。

〔参考文献〕

Harrisson J.F.C., *The second coming, popular millenarianism 1780-1850* (1979, London & Henley).

Hill, Frances, "Nationalist millenarians and millenarian nationalists" (*American Behavioral Scientist*, 16-2. pp. 269-288. 1972)

Lewey, Guenter, *Religion and revolution* (1974. Oxford U.P., New York)

Wilson, Bryan R., *Magic and millennium, sociological study of religious movement of protest among tribal and third world people.* (1973. London)

斎藤照子

この農民叛乱を支えたエースを理解するためにはこうした方向からの考察が重要であることは確かである。しかし叛乱の過程を見ると土着的、宗教的なもの以外の多くの要素がこの叛乱には含まれている。

指導者について見れば、サヤー・サンという一人のカリスマに率いられた叛乱ではなく各地のG C B Aの農村結社、ウンターヌ・アティンのリーダー達あるいは僧侶達が、各々の地方の農民を率いて蜂起している。

治・経済的、文化的圧力は、民族又は社会の上層・下層をふくめた千年王国信仰をもたらす。ユダヤ教はその代表例であるが、かかる場合、千年王国信仰が民族主義運動の傾向をもち、両者が重なり合い交互に作用しあうのは不思議ではない。個人的なメシアの代りに集団としての民族がメシアの座を占領し、進歩の概念と結びつき政治統制の手段と化することが多い。G・リュウィーは近代インドの民族主義運動、ビルマのサヤ・サンの反英運動について、民族主義と千年王国運動との結合関係を指摘した。インド・ナショナリズムは古代インドの靈的・精神的文化を理想化し、神聖にして母なる国インドの観念を作り上げ、神と人との一体化を説くバラモン教、ヒンドゥー教の世界は「新しいエルサレム」の地上における実現を主張する千年王国信仰に外ならないと説く。

サヤ・サンの運動は未熟な千年王国運動で民衆がサヤ・サンに対してもったイメージは転輪王、未来仏のそれであり、彼の実現する世界は千年王国的色彩をもつとリュウィーは説く。

民生の危機の第二原因として、既存の権力が特定の宗教々団に迫害を加え、信者たちの生活が破局に陥れられる場合がある。この場合特に教祖が殉教者となれば、強いメシア信仰が教団の教義の主軸となり易い（ゾロアスター教、マニ教、キリスト教、イスラム教シーア派）。

サヤー・サン叛乱をめぐって

1930—32年にかけて下ビルマ、デルタ地帯を主要な舞台として勃発した、いわゆるサヤー・サン叛乱はビルマ史上最大の農民叛乱として、またその運動の独特な性格によって研究者の関心を惹いてきた。なかでも叛乱の指導者サヤー・サンという人物のカリスマ性、イレズミに代表される戦術における呪術的因素、さらに農民救済のヴィジョンの千年王国的色彩など、この叛乱の伝統的、土着的、宗教的側面が多くの考察の対象となっている。

第三の原因として民衆一般の生活の危機を挙げうる。中国の王朝革命史において、千年王国信仰の強いセクトが起爆作用の役目をはたし、動乱、革命への過程が始まったのはその一つの好例である。サヤ・サンのケースも他の一例であろう。しかしこの場合、宗教には無関心のアウトサイダー、軍事的政治的野心家、復讐者や、もの盗りなど、暴力によって私的目的を果たそうとする人々が宗教運動のかもし出す異常な心理状況、熱気の中で動乱に参加し、このため運動の規模は拡大するが、その性格は変質する。G・リュウィーはこのような事例を数多く指摘するが、サヤ・サンの運動の後半段階もその一例である。

〔参考文献〕

Harrisson J.F.C., *The second coming, popular millenarianism 1780-1850* (1979, London & Henley).

Hill, Frances, "Nationalist millenarians and millenarian nationalists" (*American Behavioral Scientist*, 16-2. pp. 269-288. 1972)

Lewey, Guenter, *Religion and revolution* (1974. Oxford U.P., New York)

Wilson, Bryan R., *Magic and millennium, sociological study of religious movement of protest among tribal and third world people.* (1973. London)

斎藤照子

この農民叛乱を支えたエースを理解するためにはこうした方向からの考察が重要であることは確かである。しかし叛乱の過程を見ると土着的、宗教的なもの以外の多くの要素がこの叛乱には含まれている。

指導者について見れば、サヤー・サンという一人のカリスマに率いられた叛乱ではなく各地のG C B Aの農村結社、ウンターヌ・アティンのリーダー達あるいは僧侶達が、各々の地方の農民を率いて蜂起している。

戦術も呪術的行為に頼るだけでなく、銃砲の強奪、確保等が重要な戦略とされている。千年王国的ヴィジョンについては、英國植民統治の打倒との関連で、ビルマ人の仏教王による治世が説かれており、容易にナショナリズム、独立運動の崩芽となり得る内容である。このように伝統的因素と近代的ナショナリズムに通ずる要素が混こうした叛乱であったと言えよう。

次にこの叛乱の背景、原因としては植民地統治下に形成された下ビルマ農村社会の特異な性格が重要な意味を持ったのではないかと思われる。

上ビルマからの移民によって切り拓かれた下ビルマの米作地帯の農業生産様式は従来の伝統的農業とは全く異なり、輸出向け商品のモノカルチュア栽培であり、農家経済を世界市場に直結せしめるものだった。農業労働は個々の作業に分断され、賃労働が基幹的な役

割を果し、相互扶助はまったく存在しなかつた。そこに新たに形成された村々は人口の流動の甚しい単なる居住地区であり、コミュニカルな結合関係を欠いた特異な村だった。こうした環境の中で下ビルマ米作農民の急速な分解、没落が展開する。とりわけ1920年代には下ビルマ米作農民の圧倒的多数を農業労働者の境遇に落し込む程の徹底的な分解が進行した。

サヤー・サン叛乱の担い手はこうした下ビルマの没落農民たちであった。叛乱に投じた彼らのエース、伝統の回復というヴィジョンに示されたそれは、あるべき社会に対する農民の選択を意味していると考えることが可能である。サヤー・サン叛乱は、前近代—近代あるいは伝統—革新という二項対立ではなく、むしろ伝統と革新との合一した民衆運動として把えることが出来るというのが報告者の暫定的結論である。

斎藤照子氏報告へのコメント

田村克己

サヤー・サンの運動が宗教的とされるのは主に三つの理由による。第一に、「仏陀王」の支配する世の実現をめざし、仏教の復興を標榜した点である。第二に、サヤー・サン自身呪力を持つとされ、入墨や針を膚に埋める等の呪術的行為を行なった点である。第三に、蜂起前にナッの祀られた点である。しかしこれらからサヤー・サン運動を宗教運動の一形態とするのは疑問である。ナッ儀礼は、ビルマ人が或る種の行為をする前に、その無事と成功を祈って行う。その行為はしばしば非日常的なものであるが、例えば商売上の取引のような世俗的なものも含む。ナッ儀礼を伴うことは、行為が宗教的であることを意味しない。第二の点は、ビルマ人の宗教世界にしばしば登場する超能力者ウェイザへの信仰に関わるこの信仰が、サヤー・サンの運動の中にみられ、彼のカリスマ性に一定の寄与をしたとしても、それぞれが運動の核心にあったとは考えられない。初期の段階で呪術による「無傷」の信仰が崩れた後も運動は続き、運動

の本隊は官憲との衝突を避ける現実的戦術をとったからである。サヤー・サンは、シャン高原に逃げて再興を計った時にみられるように、この信仰を運動の拡大に利用したふしがある。他方ウェイザ信仰は、仏教の力に依るしながらも、一般に仏教の正統から外れるものとして低く見られ、しばしば異端視される。それゆえこれが、どこまで人々に浸透し惹き付ける力となったかは疑問である。呪術的であると同時に現実的とのサヤー・サン評は、そのまま一般のビルマ人にはてはまる。第一の点の仏教の再興も、それは常にビルマの支配者の大義名分であった。また英領化以後も多数のミニ・サヤー・サンが「仏陀王」等を僭称して蜂起した。それは、ビルマの伝統的な権力奪取のパターンである。この点や先のウェイザ信仰の利用、ガロン等の伝統的シンボルの操作の点からも、サヤー・サンの運動は、伝統的な政治運動の型を踏襲している。こうした運動が成功した場合に政治的なものとされ、不成功の場合に宗教的運動と

戦術も呪術的行為に頼るだけでなく、銃砲の強奪、確保等が重要な戦略とされている。千年王国的ヴィジョンについては、英國植民統治の打倒との関連で、ビルマ人の仏教王による治世が説かれており、容易にナショナリズム、独立運動の崩芽となり得る内容である。このように伝統的因素と近代的ナショナリズムに通ずる要素が混こうした叛乱であったと言えよう。

次にこの叛乱の背景、原因としては植民地統治下に形成された下ビルマ農村社会の特異な性格が重要な意味を持ったのではないかと思われる。

上ビルマからの移民によって切り拓かれた下ビルマの米作地帯の農業生産様式は従来の伝統的農業とは全く異なり、輸出向け商品のモノカルチュア栽培であり、農家経済を世界市場に直結せしめるものだった。農業労働は個々の作業に分断され、賃労働が基幹的な役

割を果し、相互扶助はまったく存在しなかつた。そこに新たに形成された村々は人口の流動の甚しい単なる居住地区であり、コミュニカルな結合関係を欠いた特異な村だった。こうした環境の中で下ビルマ米作農民の急速な分解、没落が展開する。とりわけ1920年代には下ビルマ米作農民の圧倒的多数を農業労働者の境遇に落し込む程の徹底的な分解が進行した。

サヤー・サン叛乱の担い手はこうした下ビルマの没落農民たちであった。叛乱に投じた彼らのエース、伝統の回復というヴィジョンに示されたそれは、あるべき社会に対する農民の選択を意味していると考えることが可能である。サヤー・サン叛乱は、前近代—近代あるいは伝統—革新という二項対立ではなく、むしろ伝統と革新との合一した民衆運動として把えることが出来るというのが報告者の暫定的結論である。

斎藤照子氏報告へのコメント

田村克己

サヤー・サンの運動が宗教的とされるのは主に三つの理由による。第一に、「仏陀王」の支配する世の実現をめざし、仏教の復興を標榜した点である。第二に、サヤー・サン自身呪力を持つとされ、入墨や針を膚に埋める等の呪術的行為を行なった点である。第三に、蜂起前にナッの祀られた点である。しかしこれらからサヤー・サン運動を宗教運動の一形態とするのは疑問である。ナッ儀礼は、ビルマ人が或る種の行為をする前に、その無事と成功を祈って行う。その行為はしばしば非日常的なものであるが、例えば商売上の取引のような世俗的なものも含む。ナッ儀礼を伴うことは、行為が宗教的であることを意味しない。第二の点は、ビルマ人の宗教世界にしばしば登場する超能力者ウェイザへの信仰に関わるこの信仰が、サヤー・サンの運動の中にみられ、彼のカリスマ性に一定の寄与をしたとしても、それぞれが運動の核心にあったとは考えられない。初期の段階で呪術による「無傷」の信仰が崩れた後も運動は続き、運動

の本隊は官憲との衝突を避ける現実的戦術をとったからである。サヤー・サンは、シャン高原に逃げて再興を計った時にみられるように、この信仰を運動の拡大に利用したふしがある。他方ウェイザ信仰は、仏教の力に依るしながらも、一般に仏教の正統から外れるものとして低く見られ、しばしば異端視される。それゆえこれが、どこまで人々に浸透し惹き付ける力となったかは疑問である。呪術的であると同時に現実的とのサヤー・サン評は、そのまま一般のビルマ人にはてはまる。第一の点の仏教の再興も、それは常にビルマの支配者の大義名分であった。また英領化以後も多数のミニ・サヤー・サンが「仏陀王」等を僭称して蜂起した。それは、ビルマの伝統的な権力奪取のパターンである。この点や先のウェイザ信仰の利用、ガロン等の伝統的シンボルの操作の点からも、サヤー・サンの運動は、伝統的な政治運動の型を踏襲している。こうした運動が成功した場合に政治的なものとされ、不成功の場合に宗教的運動と

されるのは、当を得ていない。サヤー・サンの運動が宗教的色彩を持つのは、運動の特質が宗教的であったからでなく、ビルマ政治の政治的一宗教的伝統のゆえである。

サヤー・サン運動が、それ以前のミニ・サヤー・サンの諸蜂起に比し、広がりと普遍性を持ったことは、当時の下ビルマの経済状況と、覚醒期の近代的民族主義運動の影響が寄与している。これらのこととは、運動を単なる個人の政治的野心のレベルにとどめなかつた。

1930年ゲ・ティン・ソヴィエト (Xô-Viêt Nghê-Tink) をめぐって

白石昌也

ゲ・ティン・ソヴィエトは、1930—31年にベトナム中部（中圻）のゲアン・ハティン2省の農村地域に設立された村落レベルの革命政権のことである。この運動をめぐって従来から幾つかの点で研究者の間に論争がある。

(1)まず第1に運動の原因に関しては、世界恐慌の影響を強調する論者と、それを否定する論者がある。報告者はこれに関して、ゲ・ティン運動の開始期には、世界恐慌の影響はまだ中圻にまで波及していなかったとの立場を取り、この運動を世界恐慌下の一大カタスロフィーの下に生じたものであるとの見解を否定した。運動の原因としては、むしろ慢性的な窮乏状態と地方的不作（ただしそまだ飢餓状態には至っていない）が重なった条件下に共産党の指導という強力なインパクトがあったことを重視すべきであるとした。

(2)第2にソヴィエト運動の性格に関して、それが共産党のリーダーシップが貫徹したものと捉えるべきか、それとも農民大衆（および下部党员）の自発性を重視すべきかに関しては、次のように論じた。すなわち、この運動の端緒としては、政治的な契機、つまり共産党の組織活動とプロパガンダに触発されたという色彩が強い。しかし共産党の活動が触媒の役割を果したとするならば、それに大量の農民を結集し得た条件は、ゲ・ティン地方に

またサヤー・サンの運動は「王宮」の建立や占拠という象徴的レベルに固執しなかった。それは、より現実的な戦略・戦術を伴っていた。「王宮」からの早期撤退、ゲリラ戦術、シャンとの連帯の動き、通信連絡網を断つ戦略等は、それを示す。サヤー・サンの運動はこうした近代的イデオロギーや戦略が媒介となって、ビルマの伝統的政治（一宗教）運動のパターンから一步踏み出したのである。

されるのは、当を得ていない。サヤー・サンの運動が宗教的色彩を持つのは、運動の特質が宗教的であったからでなく、ビルマ政治の政治的一宗教的伝統のゆえである。

サヤー・サン運動が、それ以前のミニ・サヤー・サンの諸蜂起に比し、広がりと普遍性を持ったことは、当時の下ビルマの経済状況と、覚醒期の近代的民族主義運動の影響が寄与している。これらのこととは、運動を単なる個人の政治的野心のレベルにとどめなかつた。

1930年ゲ・ティン・ソヴィエト (Xô-Viêt Nghê-Tink) をめぐって

白石昌也

ゲ・ティン・ソヴィエトは、1930—31年にベトナム中部（中圻）のゲアン・ハティン2省の農村地域に設立された村落レベルの革命政権のことである。この運動をめぐって従来から幾つかの点で研究者の間に論争がある。

(1)まず第1に運動の原因に関しては、世界恐慌の影響を強調する論者と、それを否定する論者がある。報告者はこれに関して、ゲ・ティン運動の開始期には、世界恐慌の影響はまだ中圻にまで波及していなかったとの立場を取り、この運動を世界恐慌下の一大カタスロフィーの下に生じたものであるとの見解を否定した。運動の原因としては、むしろ慢性的な窮乏状態と地方的不作（ただしそまだ飢餓状態には至っていない）が重なった条件下に共産党の指導という強力なインパクトがあったことを重視すべきであるとした。

(2)第2にソヴィエト運動の性格に関して、それが共産党のリーダーシップが貫徹したものと捉えるべきか、それとも農民大衆（および下部党员）の自発性を重視すべきかに関しては、次のように論じた。すなわち、この運動の端緒としては、政治的な契機、つまり共産党の組織活動とプロパガンダに触発されたという色彩が強い。しかし共産党の活動が触媒の役割を果したとするならば、それに大量の農民を結集し得た条件は、ゲ・ティン地方に

またサヤー・サンの運動は「王宮」の建立や占拠という象徴的レベルに固執しなかった。それは、より現実的な戦略・戦術を伴っていた。「王宮」からの早期撤退、ゲリラ戦術、シャンとの連帯の動き、通信連絡網を断つ戦略等は、それを示す。サヤー・サンの運動はこうした近代的イデオロギーや戦略が媒介となって、ビルマの伝統的政治（一宗教）運動のパターンから一步踏み出したのである。

シップの介在を必ずしも不可欠の前提条件とは考えない。これに対して第2の考え方は、農民は極めて上昇志向的であって、伝統社会には欠如していた新たな価値観・組織力・团结や平等や福祉機能に対して、積極的に反応するものとする。つまり新たな社会秩序の出現にあたっては、外部からの刺激や組織化の下に、村落内に新たな、しかも有効なリーダーシップが形成されることが前提条件となるとみなす。

報告者の見解は、運動における農民の自発的性格を強調しつつも、外部から新たな価値観が提供された側面の存在することをも否定

しない。しかし外部のリーダーシップによってもたらされた新たな価値観、新たな社会の概念が農民に受容されたのは、それが彼らの伝統的な価値観と共鳴したがゆえであると考える。つまり農民は、新たなリーダーシップによってもたらされた新たな組織と新たな理想社会のイメージの中に、従来から自分たちの抱いていたあるべき社会（決してかつて現実にあった社会ではない）のイメージが合致したがゆえに、ゲ・ティン・ソヴィエトというひとつの理想社会を、現実のものとして、その時、そこに、実現し得たのではないかと考える。

白石昌也氏報告へのコメント

吉田元夫

この年は庚午の年
天は民に平安と泰和を与えたり

この度は梅黒帝様に
われらを助けよとおたのみす

お札の降ること幾度か
降りては民は心を一つにし
堂々省長官のもとへおしかけよと呼びかける

これは、ゲティン省ナムダン県スアンリュウ村に伝わる、ソビエト運動を題材とした、民謡の一節である。これは、ゲティン・ソビエト運動が、千年王国的民衆運動とも接点を有していたことを示す資料であるが、全体としてみれば、このベトナムの運動は、きわめて世俗的な性格がつよかつたと見るべきであろう。その要因としては、村落が動員の枠組となったことと、基層レベルに、在村知識分子を中心とする、共産党というリーダーシップが存在したことが、重要であろう。

そこでは、次のような点が注目される。

① 村落との関係で重要なのは、公田=村の財=民の財という図式が、いつ頃成立したのか、という点である。これを、単純に、「伝統的」なものとみるのは問題であるが、ゲティン・ソビエト運動よりはかなり前に、こう

した意識は形成されていたと見られる。

② ただし、こうした規範意識の単純な延張上に、ソビエト運動を位置づけるには疑問がある。ソビエト運動では、従来の村落社会の秩序観の逆転が行なわれたことが重要であり、ここでは、基層の共産党の役割を無視することはできない。

③ 当時の共産党を論ずるには、党中央、地方指導機関（中折地方委員会、省委員会）および基層党组织（県・村レベル）を区別して議論しなければならない。当時は、この三つのレベルで、その志向性に相当のズレが存在していた。党中央の考えを越えた「過激」な運動の展開も、「党の指導を民衆が乗り越えた」という図式よりは、基層党组织の「過激」な志向性に、その原因を求められるのではないかろうか。

④ この党における中央と地方の問題を含め、ゲティン地方を「伝統的」地域とみるのは疑問である。ゲティンは、チュオンソン（安南）山脈の道で東北タイと容易にむすびついていたために、外部世界の影響が、ベトナムで最も及びやすい地域の一つであった。こうしたゲティンの「フロンティア性」を無視しては、ソビエト運動は理解できないであろう。

シップの介在を必ずしも不可欠の前提条件とは考えない。これに対して第2の考え方は、農民は極めて上昇志向的であって、伝統社会には欠如していた新たな価値観・組織力・团结や平等や福祉機能に対して、積極的に反応するものとする。つまり新たな社会秩序の出現にあたっては、外部からの刺激や組織化の下に、村落内に新たな、しかも有効なリーダーシップが形成されることが前提条件となるとみなす。

報告者の見解は、運動における農民の自発的性格を強調しつつも、外部から新たな価値観が提供された側面の存在することをも否定

しない。しかし外部のリーダーシップによってもたらされた新たな価値観、新たな社会の概念が農民に受容されたのは、それが彼らの伝統的な価値観と共鳴したがゆえであると考える。つまり農民は、新たなリーダーシップによってもたらされた新たな組織と新たな理想社会のイメージの中に、従来から自分たちの抱いていたあるべき社会（決してかつて現実にあった社会ではない）のイメージが合致したがゆえに、ゲ・ティン・ソヴィエトというひとつの理想社会を、現実のものとして、その時、そこに、実現し得たのではないかと考える。

白石昌也氏報告へのコメント

吉田元夫

この年は庚午の年
天は民に平安と泰和を与えたり

この度は梅黒帝様に
われらを助けよとおたのみす

お札の降ること幾度か
降りては民は心を一つにし
堂々省長官のもとへおしかけよと呼びかける

これは、ゲティン省ナムダン県スアンリュウ村に伝わる、ソビエト運動を題材とした、民謡の一節である。これは、ゲティン・ソビエト運動が、千年王国的民衆運動とも接点を有していたことを示す資料であるが、全体としてみれば、このベトナムの運動は、きわめて世俗的な性格がつよかつたと見るべきであろう。その要因としては、村落が動員の枠組となったことと、基層レベルに、在村知識分子を中心とする、共産党というリーダーシップが存在したことが、重要であろう。

そこでは、次のような点が注目される。

① 村落との関係で重要なのは、公田=村の財=民の財という図式が、いつ頃成立したのか、という点である。これを、単純に、「伝統的」なものとみるのは問題であるが、ゲティン・ソビエト運動よりはかなり前に、こう

した意識は形成されていたと見られる。

② ただし、こうした規範意識の単純な延張上に、ソビエト運動を位置づけるには疑問がある。ソビエト運動では、従来の村落社会の秩序観の逆転が行なわれたことが重要であり、ここでは、基層の共産党の役割を無視することはできない。

③ 当時の共産党を論ずるには、党中央、地方指導機関（中折地方委員会、省委員会）および基層党组织（県・村レベル）を区別して議論しなければならない。当時は、この三つのレベルで、その志向性に相当のズレが存在していた。党中央の考えを越えた「過激」な運動の展開も、「党の指導を民衆が乗り越えた」という図式よりは、基層党组织の「過激」な志向性に、その原因を求められるのではないかろうか。

④ この党における中央と地方の問題を含め、ゲティン地方を「伝統的」地域とみるのは疑問である。ゲティンは、チュオンソン（安南）山脈の道で東北タイと容易にむすびついていたために、外部世界の影響が、ベトナムで最も及びやすい地域の一つであった。こうしたゲティンの「フロンティア性」を無視しては、ソビエト運動は理解できないであろう。

昭和57年度 収支中間報告

(昭和57年1月1日～昭和57年12月10日)

I 収入の部

会員会費	226,000
会員論文目録売上金	7,400
前年度繰越金	604,955
	<hr/>
	838,355

II 支出の部

会報No.36印刷費	29,160
会員名簿印刷費	105,000
第27回研究大会費用	25,000
吉田氏感謝状・記念品	17,180
委員会費	3,846
事務費	25,760
郵送・通信費	148,385
	<hr/>
	354,331

III 現在高

484,024

838,355

838,355

会計委員 鈴木恒之

昭和 58 年 5 月 発行

発 行 者 東南アジア史学会

住 所 〒440 愛知県豊橋市町畠町 1-1

愛知大学文学部 伊東利勝研究室

電 話 (0532) 45-0441 内線 295・311

郵便振替 名古屋 7-56613 東南アジア史学会